長崎・沖城（おきじょう）跡 (1)

1 所在地　長崎県諫早市仲沖町・幸町

2 調査期間　一九九五年（平7）一一月～一九九六年三月

3 発掘機関　長崎県教育委員会

4 調査担当者　本田秀樹・松尾昭子・川瀬雄一・古賀　力

5 遺跡の種類　城跡

6 遺跡の年代　中世・近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

沖城は、諫早湾奥の本明川と半造川に挟まれた川口付近に築かれた城である。中世に付近を支配した西郷氏の支城とされ、その後一五八八年に入部した諫早家初代龍造寺家晴の隠居所として利用されたともいわれている。

（諫早・肥前小浜）

付近には城畠という地名も残り、かつては起伏に富む地だったようであるが、現在は一九五七年の諫早水害後に実施された大規模な耕地整理によって、水田となっている。ただ、一九六〇年代に撮影された航空写真では、沖城の痕跡と思しきソイルマークを確認することができる。

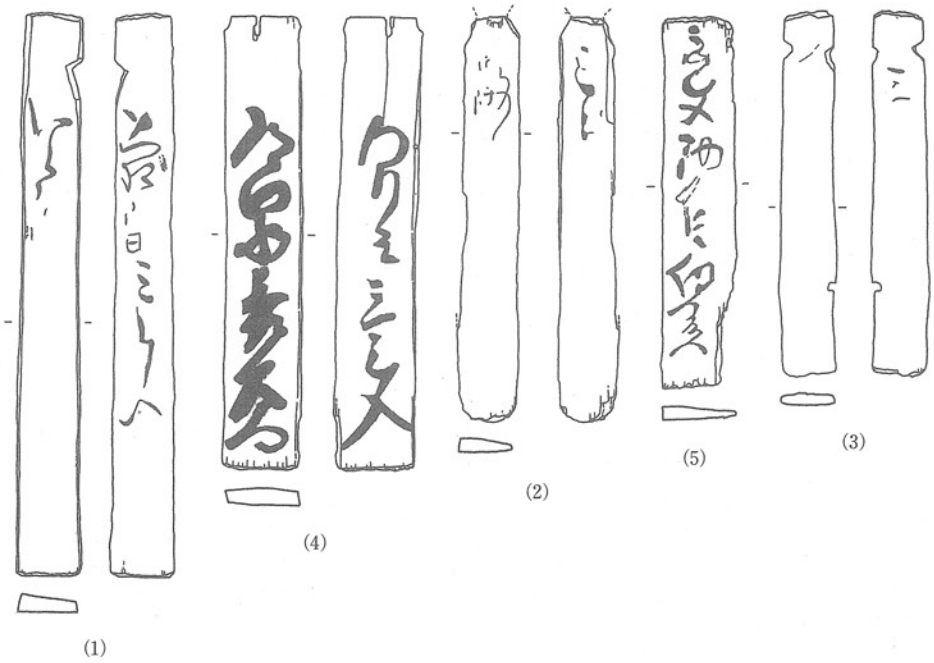
今回の調査は農道整備計画に伴うもので、一九九四年度から計三回の試掘調査を行なった後、道路予定地の計二〇〇〇㎡の範囲について四〇カ所のトレンチを設けて本調査を実施した。

その結果、一六世紀末から一七世紀代の石組・しがらみ・杭列・溝状遺構などを検出した。石組遺構は沖城の石垣に関わる遺構の可能性がある。遺物には土師器・須恵器・陶器・輸入磁器・瓦・木製品があり、一六世紀末から一七世紀代のものを主体とし、古墳時代の遺物を含んでいる。

木簡は、計五点出土した。(1)は、二五区の性格不詳の遺構から出土した。検出状況が悪く共伴遺物も明らかではないが、ゴミ穴とも推測される。(2)(3)は、一三区の四層から出土した。四層は、一六世紀末から一七世紀前半の遺物包含層である。(4)(5)は、一三区出土であるが、出土層位は不明である。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「V□□日三斗入」
　　・「V□□　　」　165×17×6　032



(1)　(2)　(3)　(4)　(5)

(2)
・〈三□」　(119)×16×4　032
・〈□□」

(3)
・「〈三　」　102×16×4　032
・「〈□□」

(4)
・「○□もみ三斗入　」　133×22×5　011
・「○今泉善右衛門尉」

(5)
「三斗入〔納カ〕□〔麦カ〕□□」　109×21×4　011

今回出土した木簡には、上端に左右から切り込みを入れたものもみられる。内容としては、「三斗」など穀物や液体の単位が認められることから、これらの売買や調達に関するものと考えられる。

9　関係文献

長崎県教育委員会『沖城跡』（長崎県文化財調査報告書第一四三集　一九九八年）

（川口洋平）